

# 「は」と「が」の使い分けのあり方を定量的に確認する試み

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 庵 功雄  |
| 雑誌名 | 言語資源活用ワークショップ発表論文集  |
| 巻   | 6   |
| ページ | 198-203   |
| 発行年 | 2021  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15084/00003493">http://doi.org/10.15084/00003493</a> |

# 「は」と「が」の使い分けのあり方を定量的に確認する試み

庵 功雄（一橋大学国際教育交流センター）<sup>†</sup>

## A Quantitative Investigation of the Validity of a Flowchart on the Distinction between *Wa* and *Ga*

Isao Iori (Hitotsubashi University, Center for Global Education and Exchange)

### 要旨

本発表では、日本語教育文法の立場からした「は」と「が」の使い分けのフローチャートを大規模コーパスである CSJ-RDB を用いて検証した。その結果、フローチャートの妥当性が証明されたと考える。

### 1. はじめに

「は」と「が」の使い分けは、日本語学習者にとって最難関の文法項目であると見なされている。これについて、発表者は学習者が産出できるようになることを目的とするフローチャートを提案してきた（庵 2018, 2020b）。

本発表では、このフローチャートの妥当性を CSJ-RDB ver.2.0 を用いて定量的に検証する。

### 2. 「は」と「が」に関するフローチャート

本節では、「は」と「が」に関する発表者の考え方のうち、本発表の内容に関連性が高いものを紹介し、最後にフローチャートを挙げる。

#### 2.1 前提となることから

言語表現を構成する、音声・音韻、語彙、文法（形態を含む）のうち、語彙と文法には、意味がわかればいい理解レベルのものと、意味がわかった上で使える必要がある産出レベルのものがある。

例えば、「事由」と「理由」を比べると、意味はともに「理由」だが、「事由」は主に法律や行政に関する分野で使われる。したがって、「事由」はそうした仕事に関わらない日本語母語話者にとっては使う必要がない語である。ただし、日本語の語彙なので、意味を知っている必要はあるため、理解レベルである。一方、「理由」は明らかに産出レベルである。

同様の違いは、文法においても見られる。例えば、(1) の「べく」は日本語母語話者においても必ずしも産出レベルではなく、普通は「ために」が使われると思われる。

(1) 企業年金制度についても、制度の安定化と充実のための見直しを内容とする同法の施行を円滑に行うべく準備を進める。（平成 17 年版男女共同参画白書）

このように、母語話者においても、理解レベルと産出レベルの違いがあるが、こうした違いは非母語話者にとってはより顕著であり、両者を区別することは教育上重要である。本発表では、この 2 つの区別を受けて、産出のための文法の観点から「は」と「が」の使い分けを考えて定式化したフローチャートを提示し、その妥当性を定量的に検証する。

#### 2.2 「産出のための文法」としての捉え方

産出のための文法として重要な観点に、「他の表現が可能である場合でも、その表現を使って間違いならなければ、その表現を使えばよい」ということがある（庵 2016）。

<sup>†</sup> isaioiri@courante.plala.or.jp

2つの類義形式 A と B があり、その文脈ではいずれか一方を使う必要があるとき、両者の分布は次のようになる。

表1 類義表現の使い分けの分布

| Case | A | B |
|------|---|---|
| 1    | ○ | × |
| 2    | × | ○ |
| 3    | ○ | ○ |

このとき、Case1の方がCase2よりも制限が厳しければ、Case1を有標と考えることができる<sup>1</sup>。ここで、太枠の部分に注目すると、Case2でもCase3でもBを使って間違いと判断されることはない。したがって、AとBの使い分けの規則は次のようになる<sup>2</sup>。

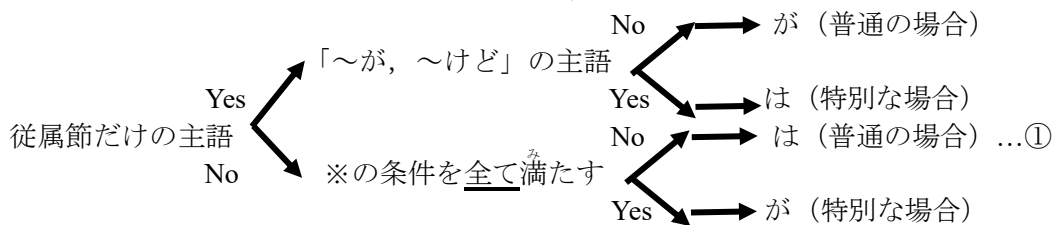
(2) a. Case1の文脈ではAのみが使われる

b. それ以外の場合はBが使える

このように捉えることで、「は」と「が」をはじめ、多くの類義表現の記述を簡素化できる(庵 2016, 2018)。また、(2)は「産出のための文法」の理念でもある「(規則のカバー率) 100%を目指さない」文法」からも出てくるものである(庵 2011, 2015, 2016)。

### 2.3 「は」と「が」の使い分けのフローチャート

以上を受けて、「は」と「が」の使い分けをフローチャートを作ると次のようになる(このフローチャートについて詳しくは庵(2018, 2020b)を参照されたい)。



- ※の条件：
- ・主語は「私」「あなた」ではない
  - ・述語は動詞(テンスを持つ)で、否定形ではない
  - ・主語はその話に初めて出てきた

①の場合に「が」を使うと、「強調」の意味になる

図1 「は」と「が」の使い分け

このフローチャートの意図するところは次のようにまとめられる。

- (3) a. 従属節の主語は基本的に「が」で、「が, けど」節の場合のみ「は」になる  
 b. 主節と単文の主語は基本的に「は」で、特別な場合のみ「が」になる  
 c. bにおいて無標で「は」が使われる場合に「が」を使うと総記の解釈になる

## 3. 調査の概要

本発表では、図1のフローチャートをCSJ-RDB ver.2.0を用いて定量的に検証する。

### 3.1 「は」と「が」の使い分けと「主語」

「は」と「が」の使い分けを考える上で重要なのは、主題(theme, topic)と主語(subject)の区別であるが、ここでは、次のように規定しておく<sup>3</sup>。

- (4) 主題：基本的に文頭であって、その文が何について述べるものかを示す

<sup>1</sup> 無標と有標および日本語教育文法へのその応用については庵(2017, 2018)を参照されたい。

<sup>2</sup> (2a)では「Aのみ」であるのが(2b)で「Bが使える」になっていることに注意されたい。

<sup>3</sup> 「主語」をめぐる三上章の一連の議論(三上 1953, 1960ほか)が重要だが、これについては、庵(2003, 2012, 2020a)で論じているので、本発表ではこれ以上言及しない。

主語：動作，出来事，存在，状態，属性などの「主」を表す<sup>4</sup>

日本語教育という観点から最も重要なのは、「は」と「が」の位置づけである。すなわち、「は」には「主語でもある「は」と「主語ではない「は」があること、「が」は基本的に「主語」を表す<sup>5</sup>ことを教師側が認識し、そのことを学習者に伝えることが重要である。

「主語でもある「は」と「主語ではない「は」はそれぞれ次のようなものである。

(5) 田中さんは この本を書いた。

主題&主語

(6) この本は 田中さんが書いた。

主題 主語

(5) の「田中さんは」は「は」がついているので「主題」であり、かつ、「書く」という動作の主であるので「主語」でもある。一方、(6) の「この本は」は主題ではあるが主語ではない。「書く」という動作の主である主語は(5)と同じく「田中さんが」である。

もう1つ重要なのは、「は」と「が」の使い分けが問題になるのは、「は」が主語も表すときに限られるということである(野田 1996)。

### 3.2 CSJ と CSJ-RDB

本発表の分析に用いる日本語話し言葉コーパス(CSJ)は自発性の高い独話を主対象とした日本語の音声コーパスであり、学会における実際の研究発表(学会講演)と一般話者による主に個人的な内容に関する10~15分程度のスピーチ(模擬講演)がその中心を占める。これ以外に対話データも一部含まれるが、本発表では独話データのみを用いて分析を行った。

分析には、CSJ-RDB Version 2.0を用いた。CSJ-RDBは、CSJのコアデータをデータベースソフトで検索できるようにしたもので、係り受け情報などが利用でき、統語的分析にも有用である(係り受けや節単位情報については丸山ほか2006を参照した。また、分析にはNavicat Premium ver.12.1.28を用いた)。

### 3.3 分析の手順

本発表の分析の手順は以下の通りである。

まず、CSJ-RDBの係り受け情報を用いて係り元の文節Aの係り先Bを特定する。この際、文節Aが「は」で終わる場合と「が」で終わる場合がそれぞれ、「は」と「が」それぞれの元データとなる。次に、文節Aと文節Bの、共通に属する節Cの中での位置をCSJ-RDBを用いて特定し、AとBの文節で測った距離を求める。最後に、文節Bの最後の短単位の節境界情報(ClauseBoundaryLabelの値)によって、文節Aの係り先の節境界を特定する。

### 3.4 分析対象の特定

3.3節の手法では「は」「が」で終わる文節が主語を表すか否かは不明なので、目視で主語であるもの(「は」の場合、厳密には「主語でもあるもの」と主語ではないものを選別した。

「は」の場合、「には」「については」などの「(格助詞相当語)+は」、「最近は」のような副詞、「実際は」のような接続詞は主語を表さない。また、三上が指摘しているように、「は」には格関係において「を」や「に」の機能を兼ねるものがある(「ハの兼務」三上 1960)。例えば、上記(6)の「この本は」は格関係では「この本を」である。こうしたものも主語を表さない。今回のデータでは「主語」「非主語」は次のようになった。

<sup>4</sup> 三上の主語廃止論においては、こうした「主」的性質を持つものは「主格(nominative)」だが「主語(subject)」ではないとされるが、本発表では、三上の主語廃止論に基本的に賛同しつつも、「主」的性質を持つものを「主語」と呼ぶ(これについて詳しくは庵 2003 参照)。なお、主語についてはさらに考えるべき点があるが、これについてはIori(2017)を参照されたい。

<sup>5</sup> 「が」には主語を表さないものもある。これについては庵(2018)の第1部§9を参照されたい。

表2 主語と非主語<sup>6</sup>（「は」の場合）

|     |       |             |     |             |     |
|-----|-------|-------------|-----|-------------|-----|
| 主語  | は     | 3396        | 非主語 | とき（に）は      | 158 |
|     | というのは | 455         |     | 場合（に）は      | 138 |
|     | その他   | 23          |     | ためには        | 30  |
| 合計  |       | <b>3874</b> |     | ては          | 12  |
| 非主語 | は     | 1419        |     | 実は          | 87  |
|     | というのは | 184         |     | 実際（に）は      | 37  |
|     | では    | 828         |     | 本当は         | 30  |
|     | には    | 541         |     | 今は          | 58  |
|     | とは    | 141         |     | 最近は         | 31  |
|     | からは   | 45          |     | 昔は          | 14  |
|     | までは   | 45          |     | 当時は         | 17  |
|     | よりは   | 21          |     | 最初は         | 22  |
|     | としては  | 207         |     | まずは         | 16  |
|     | については | 96          |     | 次は          | 14  |
|     | に関しては | 61          |     | その他の副詞・接続詞  | 635 |
|     | に対しては | 33          | 合計  | <b>4979</b> |     |
|     | にとっては | 16          |     |             |     |

一方、「が」の場合は表3のようになる。

表3 主語と非主語（「が」の場合）

|     |             |
|-----|-------------|
| 主語  | <b>7515</b> |
| 非主語 | 711         |
| 合計  | <b>8226</b> |

このうち、今回は、「は／が」が節頭にあり主語である場合を考察対象とする。この条件を満たすのは、「は」が1864件、「が」が1543件である。

#### 4. 結果と考察

本節では分析結果と考察について述べる。

##### 4.1 係り先

まず、「は／が」の係り先をCSJの単位である「絶対境界」「強境界」「弱境界」ごとに集計すると、次のようになる。

表4 「は」と「が」の係り先の境界

|      | は     | が    |
|------|-------|------|
| 絶対境界 | 1020↑ | 458↓ |
| 強境界  | 405   | 296  |
| 弱境界  | 439↓  | 789↑ |
| 合計   | 1864  | 1543 |

$\chi^2(2)=302.846$ ,  $p<.001$ , Cramer's  $V=0.298$  (↑: 有意に多い, ↓: 有意に少ない)

ここで、絶対境界は文末、強境界、弱境界はそれぞれ南(1974, 1993)のC類、B類にほぼ対応する。そのことから表4の結果は、文の場合に主語は「は」で、従属節の場合は「が」

<sup>6</sup> 実は、「は」と「が」の使い分けよりもこうした非主語の「は」の使い方の方が難しい(庵 2020b)。

でマークされるのが無標という図1のフローチャートの妥当性を示していると言える。

#### 4.2 係り受け間の距離

次に、係り受け間の距離を文節数で測ると、次のようになる。



図2 「は」と「が」の係り受けにおける文節距離の平均値

ここで、助詞（「は」と「が」）×境界（「絶対」「強」「弱」）の2要因分散分析を行うと、助詞の主効果  $F(1,3401)=344.01$ ,  $p<.01$ , 境界の主効果  $F(2,3401)=22.35$ ,  $p<.01$ , 両者の交互作用  $F(2,3401)=8.58$ ,  $p<.01$  が全て有意だった。助詞に対する境界の単純主効果はいずれの境界でも「は」が「が」より有意に高かった。一方、境界に対する助詞の単純主効果は「は」「が」いずれでも有意で、HSD法による多重比較の結果、「は」では絶対>強, 絶対>弱, 「が」では絶対>弱, 強>弱が有意であった。これらからいずれの境界でも「は」は「が」よりも文節距離が長いことがわかった。以上から、「は」は文末まで大きく係り、「が」は述語の語幹まで小さく係るという三上章の指摘（三上1960:115）の妥当性が確認された。

#### 4.3 絶対境界（文末）の際の主語の人称

続いて、文末に当たる絶対境界の際の係り元の主語の人称を見ると、次のようになる。

表5 絶対境界における係り元の主語の人称

|     | は   | が   |
|-----|-----|-----|
| 1人称 | 120 | 3   |
| 3人称 | 782 | 384 |
| 合計  | 902 | 387 |

表5から「1人称+が」で始まり、文として終止することは極めて少ないことがわかる。これは、「1人称+が」で始まる文では「が」は必ず総記（久野1973）の解釈になるという図1のフローチャートの有効性を示すだけでなく、聴解においても重要な情報となる<sup>7</sup>。

#### 4.4 絶対境界（文末）の際の係り先の品詞

最後に、絶対境界の際の係り先の品詞を見ると、次のようになる。

表6 絶対境界における係り先の品詞

|      | は    | が    |
|------|------|------|
| 動詞   | 510↓ | 268↑ |
| 形容詞  | 62↓  | 42↑  |
| 名詞+だ | 328↑ | 77↓  |
| 合計   | 900  | 387  |

$\chi^2(2)=35.90$ ,  $p<.001$ , Cramer's  $V=0.167$  (↑: 有意に多い, ↓: 有意に少ない)

表6から、「は」が名詞文で、「が」が動詞文で使われやすいと言えるが、これは、「は」

<sup>7</sup> 本発表で用いたCSJは3.2節に挙げた性質からも講義の聴解の研究に適している。

文の典型が属性叙述文, 「が」文の典型が属性叙述文であることを意味しており, 日本語文法研究における定説 (Ex. Kuroda 1972, 益岡 1987, 仁田 1991) を定量的に裏付ける結果となっている。なお, 「が」の形容詞の比率が高いのは「XはYがZ」文におけるYの扱いによる部分もある (今回は主語としたが, 非主語と考えることも可能である。Cf. 庵 2018)。

#### 4. まとめ

本発表では, 日本語教育文法の立場からした「は」と「が」の使い分けのフローチャートを大規模コーパスである CSJ-RDB を用いて検証した。その結果, フローチャートの妥当性が証明されたと考える。合わせて, 「は」と「が」に関する三上章の指摘(「ハの本務」に関するもの)や, 日本語文法研究における「は」と「が」に関する特徴付けの妥当性も定量的に裏付けられたと言える。

#### 謝 辞

本発表は科研費 21H00552 (研究代表者: 大津由紀雄) の研究成果の一部である。

#### 文 献

- 庵 功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』入門—日本語学の父 三上章』くろしお出版
- 庵 功雄 (2011) 「100%を目指さない文法の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 庵 功雄 (2012) 『新しい日本語学入門 (第2版)』スリーエーネットワーク
- 庵 功雄 (2015) 「産出のための文法」に関する一考察—「100%を目指さない文法」再考」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 庵 功雄 (2016) 「「産出のための文法」から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 庵 功雄 (2017) 『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
- 庵 功雄 (2018) 『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
- 庵 功雄 (2020a) 「三上章」『日本語学 特集日本語学を創った人々』39-1, 明治書院
- 庵 功雄 (2020b) 「「は」と「が」の使い分けを学習者に伝えるための試み: 「主語」に基づくアプローチ」『言語文化』57, 一橋大学
- 久野 暁 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版
- 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2006) 「第5章 節単位情報」「日本語話し言葉コーパスの構築法」『国立国語研究所報告』124, 国立国語研究所
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版から再版 (1972)
- 三上 章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- Iori, Isao (2017) “Brief Survey of Functional Differences between the “Topic” Marker *Wa* and the “Subject” Marker *Ga* in Modern Japanese”, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 58-1, 一橋大学
- S.-Y. Kuroda (1972) “The categorical and thethetic judgement”, *Foundations of Language*. 9.

#### 使用したコーパス

日本語話し言葉コーパス CSJ-RDB ver. 2.0